

## ヤンバルトサカヤスデの分布地域の拡大状況

衛生動物室 比嘉ヨシ子 岸本高男

Expansion of Distribution Area of Millipede,  
*Chamberlinius haultienensis* Wang,  
in Okinawa

Yoshiko HIGA and Takao KISHIMOTO

## I はじめに

琉球列島産倍足類については、大嶺 (1965, 1983) によって15科36種が報告されているが、ヤンバルトサカヤスデはその中に入っていない。本種は台湾の花蓮から Wang (1956) によって報告された種で、1983年11月14日に沖縄県北中城村屋宜原において大発生し、社会問題となったのが、国内での初記録である。その後、1986年までの大発生および生活史については、比嘉ら (1987) が既に報告している。

本種は倍脚綱、オビヤスデ目、ヤケヤスデ科に属し、体長22~33mm、中央部の背板の幅は約4mm、地色は薄茶色、各背板の後縁にこげ茶色の横縞がある。一見してヤケヤスデを大型化したような観を呈している。夜行性で、昼間は石の下、落葉の堆積した場所、朽ち木の下、ゴミの堆積した場所など、日当たりの悪い湿った場所に生息している。発生地では腐葉層の多い甘蔗、バナナ、柑橘類、園芸などの圃場の中でも生息している。植性(腐葉層)に選択性は余り見られない。群遊は年に2回、幼虫期と成虫期に観察され苦情の対象となっている。

今回は、初期発生から1988年までの分布拡大状況について、年次別に記録し、17市町村に及んでいることが分かったので報告する。

## II 調査方法

1) ヤスデの発生情報を得るために、環境衛生課による発生情報収集がなされ、また、研修会を通して市町村の環境衛生担当職員や保健所の衛生監視員の方々に、ヤンバルトサカヤスデ発生の通報を依頼し、協力を得た。

2) 1983年11月~1988年12月までに、個人が持ち込んだ標本、多発時に市町村の担当職員が持ち込んだ標本、保健所、環境衛生課などから入った発生情報に基づいて、種類を確認し、さらに、必要に応じて現場確認のため著者らは発生地域の生息密度調査を行った。

## III 調査結果と考察

分布状況については、1983年11月北中城村屋宜原の北城聾唖学校において、初期大発生があり、数日後には隣接地域の瑞慶覧の国道330号沿線(縁堰)約1kmにわたって群遊が見られ、午後9:00~10:30までの観察では、5603個体を確認した。

1984年6月と10月には、瑞慶覧と北谷町玉上のベル住宅地域で大発生があり、11月には沖縄市知花の某事業所と某植物園の近くと、その隣接した池原地区のモーテル敷地周辺でも群遊があった。そして、北部森林地域の東村・新川ダムの土手で成虫(♀4、♂3)を採集し、その年は4市町村に広がっていることを確認した。

1985年には北中城村を中心として隣接市町村に徐々に広がる一方で、前年12月に東村・新川ダムの土手で生息が確認されたヤスデは、一年後の11月18日に新川川流域の東村高江の民家において、一晩でバケツ半分(約3000個体)の大発生があり、5日間続いた。さらに、新川、車、牛道の部落においても群遊があった。11月16日には名護市湖辺底の園芸圃場と許田の沖縄自道車道・料金所周辺でも群遊があって、その年は5市町村に拡大。

1986年11月21日には、東村の福地ダム事務所周辺で群遊があった。また、5月30日に川崎川添い、

志川市兼固段と沖縄市池原との境にある復興橋近くの藪でも(♀16, ♂15) 生息を確認し、6市町村に広がっていることが分かった。

1987年も11月から12にかけて、群遊に関する通報が多くなり、北部地域では国頭村浜と辺土名の住宅地域、今帰仁村天底の某施設、名護市幸喜の小学校と部落内で群遊があった。また、恩納村瀬良垣のタクシー会社の宿泊施設と住宅地域、宜野座村の濁原ダム周辺牧草地でも群遊があった。中部地域では具志川市兼固段と高江洲で群遊があり、沖縄市の南桃原でも生息が確認された。北谷町の藪の多い傾斜地では、北玉、謝苅の部落々と吉原の某施設内で群遊があり、北中城村でも大城の某病院敷地および周辺藪地帯や喜舎場、島袋の新興住宅地域で群遊があった。また、6月5日には読谷村座喜味の部落内で発生ありとの通

報があって、その後座喜味城址の植え込みで(♀15, ♂15) 生息を確認した。また、南部地域では11月19日に那覇市の石嶺町と鳥堀町の住宅地域において、ヤスデが発生し、駆除相談で持ち込まれた標本(♂1)によって生息を確認した。その年は12市町村に広がりを見せた。

1988年には、名護保健所からの情報によると、11月に今帰仁村の平敷と謝名部落、名護市の中山でも生息していることが分かった。5月には宜野湾市の野嵩一帯と浦添市西原の某団地で(1㎡当たり53個体)群遊があり、また10月には西原町池田の住宅地域(♀137, ♂69/25×25cm<sup>2</sup>)と玉城村富里の体育館周辺(♀185, ♂137/25×25cm<sup>2</sup>)でも群遊があった。南部保健所によって、12月に糸満市の某植物園と浄水場でも生息を確認し、17市町村に広がっていることが分かった。

表 1. ヤンバルトサカヤスデの分布地域の拡大状況、●…群遊、○…生息の確認。

市町村	1983 (S. 58)	1984	1985	1986	1987	1988
国頭村					●11/～12/ 浜 辺土名	●10/10 浜
東 村		○12/13 新川ダムの土手	●11/18 高江、 新川、車、 牛道	●11/7～18 高江、 新川、車、 牛道 ●11/21 福地ダム事務所	●11/ 高江	●7/4, 10/14 牛道
今帰仁村					●11/10 天底	○11/ 平敷 謝名
名護市			●11/16 湖辺底 許田		●11/ 許田 幸喜	○11/ 中山
恩納村					●11/6 瀬良垣	
宜野座村					●11/11 濁原 ダム周辺牧草地、	
具志川市				○5/30 川崎川添い 兼固段と沖縄市池原の 境界(復興橋)	●11/20 兼固段 ●12/9 高江洲	
沖縄市		●11/20 池原 ●11/14 知花		●5/30 知花城址	●11/14 南桃原	
読谷村					○6/5 座喜味	
北谷町		●6/10 玉上 ベル地域	●4/, 10/, 11/, 玉上一帯	●4/28 玉上一帯	●11/4 玉上 北玉 謝苅	●4/22, 5/25 玉上 ●5/25 謝苅一帯 吉原
北中城村	●11/14 屋宜原	●6/10 瑞慶覧	●4/, 10/ 11/ 屋宜原 瑞慶覧	●4/ 瑞慶覧	●6/, 11/19 屋宜原 11/20 瑞慶覧 ●11/10 大城 喜舎場 ～11/20 子供の国の南側 島袋	●4/27 屋宜原
宜野湾市						●5/25 野嵩一帯
浦添市						●5/24 西原
西原町						●10/21 池田
那覇市					○11/19 石嶺町 鳥堀町	
玉城村						●10/31 富里
糸満市						○12/ ひめゆりパーク 南部浄水場

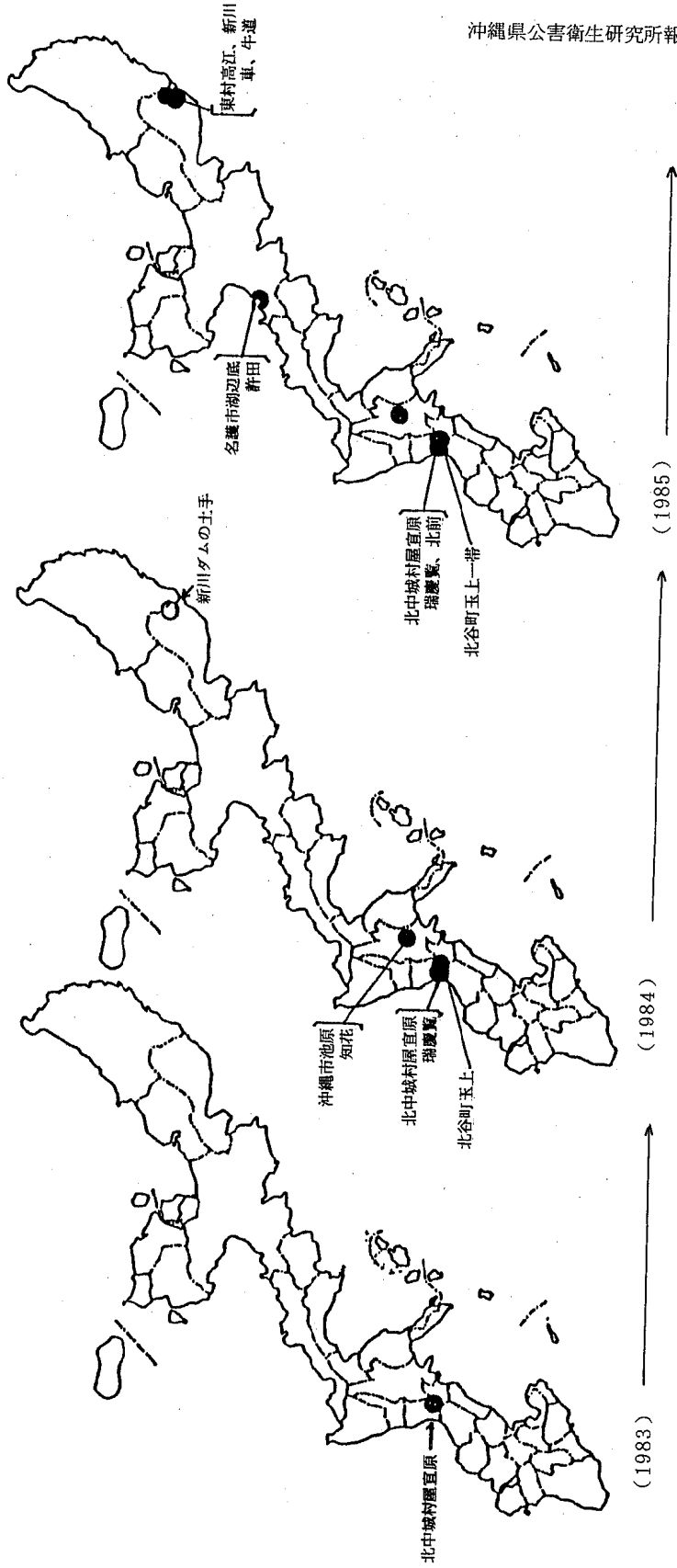


図1. ヤンバルトサカヤスデの年次別分布.

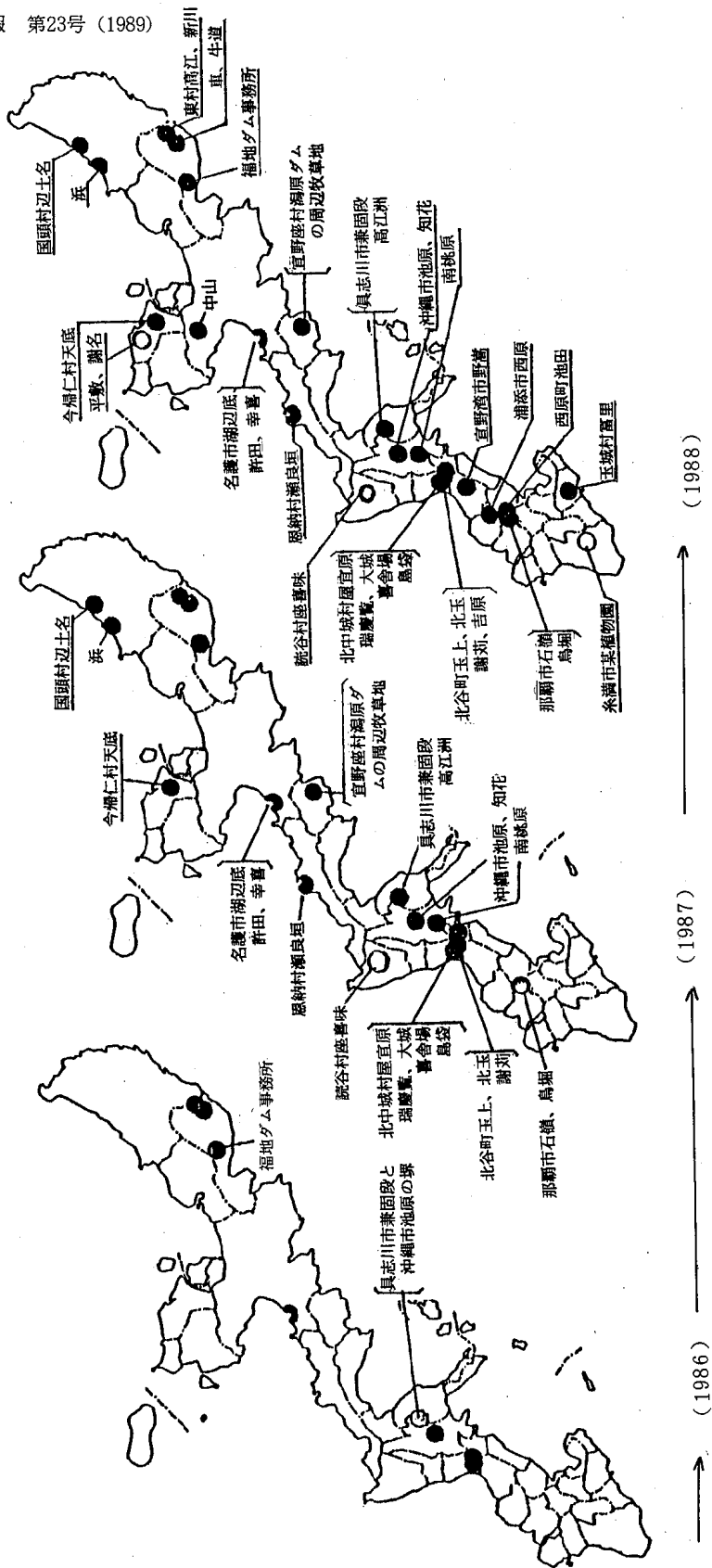


図 1. (続き).

以上のように移入後の本種の分布状況を見ると、北部地域の人家周辺の森や林、ダムの堤防や草地、河川添いの灌木の繁みや堆積物、または城址公園、植物園、墓地などの灌木の繁み、腐葉層の多い場所が好適な生息地となっている。広がり背景として、花一杯運動の普及で、発生地域からの植物や土壌の移動によるもの、土地造成のための土壌の移動によるものなど、人の活動と関係がある。また、河川の増水で腐葉層が流され、その中にいたヤスデが移動することも考えられる。

本来、土壌動物は自ら積極的に移動することは、少ないものと考えられる。従って、倍足類も移動力が小であり、局地的な分布をみせるものである。ヤンバルトサカヤスデの場合も台湾からの人為的なルートで沖縄島に侵入し(1983)、分布を広げつつある。ヤンバルトサカヤスデについて、発生および苦情に関する情報収集に勤めているが、与那国島、八重山諸島、宮古諸島および他の島嶼からの発生報告はない。動物地理学上、南方から北上した帰化動物の仲間として、今後の分布の広がり状況など、極めて重視すべき種だと考えられる。三好(1966)によると、わが国に南方から入ってきたと思われる倍足類の8科に、ヤケヤスデ科の3属 *Haplogonosoma*, *Helicorthis*, *Oxidus* が報告されており、トサカヤスデ属もその中に加わることになる。

#### IV まとめ

- 1) 1983年11月に北中城村屋宜原で大発生したヤンバルトサカヤスデは、その後、局地的な広がりをみせながら、1988年12月までに、17市町村に分布を広げている。
- 2) 分布拡大の背景として、植物や土壌の移動など人為的な要因と、河川の増水などの自然要因も関与したものと推定される。

本報告をするに当たって、ヤスデの発生情報に協力下さった市町村、保健所などの関係者、ならびに文献を提供して下さい下さった東京都立小岩高校の篠原圭三郎先生と沖縄大学の大嶺哲雄先生に感謝致します。

#### V 文献

- 1) 比嘉ヨシ子、岸本高男、“ヤンバルトサカヤスデの多発事例とその対策”、沖縄県公害衛生研究所報、20、pp.62~72、(1987)
- 2) 大嶺哲雄、“沖縄新産のヤスデ類について”、沖縄生物学会誌、2、pp.45~49、(1965)
- 3) 大嶺哲雄、“ヤスデ、沖縄大百科辞典、下巻”、沖縄タイムス社、1983、pp.727~728、(1983)
- 4) 篠原圭三郎、“群遊するヤスデ類の種と分布”、*Takakuwaia*、9、pp.1~4、(1976)
- 5) 篠原圭三郎、“ヤスデの大発生と群遊”、高校通信東書生物、170、pp.7~8、(1978)
- 6) 三好保徳、“倍脚綱、動物系統分類学、7(中B)”、東京、中山書店、pp.56~79、(1966)